

座談会

フラノマルシェがまちを変えた

北海道富良野市

西本伸顕・ふらのまちづくり株式会社代表取締役社長／株式会社北印代表取締役社長

湯浅 篤・ふらのまちづくり株式会社専務取締役／株式会社ゆあさ代表取締役

大玉英史・富良野商工会議所専務理事／元富良野市職員

『フラノマルシェの奇跡』という本をご存じですか？

衰退に向かう中心市街地をなんとかせねば！と立ち上がった「まちづくりの素人オヤジ」たちが、滞留型のまちなか商業施設「フラノマルシェ」をオープンするまでの物語です。

まちづくり成功の秘訣とは？ 立役者の「オヤジたち」にインタビューしました。

● 商店街存続の危機！

ピンチをチャンスに

「まちなか観光施設『フラノマルシェ』が、観光客だけでなく地元にも大人気です。ルーラル（田舎）とアーバン（都会）の良さをあわせ持つ、ちよつとおしゃれな田舎町「ルーバンフラノ構想」をもとに創られた魅力的な滞留空間は、年間入

込数二二〇万人を突破、売上高も七億二七〇〇万円を記録しました。

西本 そもそものはじまりは、二〇〇七年に富良野協会病院が駅の東側に移転したことでした。国道二八号線とJRの駅との結節点にある約二〇〇〇坪の二等지가、スポンと空き地になってしまった。これでは人の流れが途絶えてしまうと、近隣の五条通商店街を中心に危機感



滞留型施設「フラノマルシェ」の誕生で富良野のまちなかは大きく変わった

が高まっていたにも関わらず、行政はノープランでした。

観光地のまちなかに、いつまでも巨大な更地をさらしているわけにはいかない。幸い国も「これからは民間活力で中心市街地を活性化せよ」と言っている。そこ

にしもと・のぶあき●一九五二年富良野市生まれ。早稲田大学卒業後（株）リクルート勤務を経て三四才で地元へUターン。ふらの演劇工房・富良野塾・インターネット富良野・ラジオふらのなど、富良野のまちづくりに深くかかわる。本業は地元の青果卸会社・株式会社北印社長。



で、民間主体の法定協議会を立ち上げて、新しい中心市街地の基本計画をつくらうと湯浅くんが言い出したんです。ただし彼自身は商店街のど真ん中の人間だから、市民的ムーブメントを起こすためにもニユートラルな立場の人が必要だということとで、私にお鉢が回ってきました（笑）。

私自身、JCの時代からまちづくりに

関わってきたし、観光化の波が押し寄せているというのにまちなかがどんどん寂れていくのを見ていて、なんとかしなくちゃという思いがあったのはたしかです。さらに言うとき私も湯浅くんも、二〇〇二年のJR駅前再開発事業に、意見を述べる側の立場として参加していたんです。当時も観光都市にふさわしい駅前を創ろうとみんなで夢を描いたんだけど、いろんな諸条件が重なって思い描いたような駅前再開発にはならなかった。

その時の経験から、再開発事業は行政に任せっぱなしじゃだめだ、民間が動き出すしかないな、と思っていました。ただ、ぼくも素人なので、一緒にやってやってくれる人間が行政側にも欲しかった。すると、「大玉つてのがいるぞ」と。彼も駅前再開発では忸怩たる思いをした一人で、役所内で一番反対したにもかかわらず、最後は後始末をさせられた

という人物。そこで「このままじゃだめだ、なんとかしよう」という思いで意気投合したんです。

まちなかの一等地を使ってまち全体に回遊を促すには、これまで課題とされてきた、観光客をまちなかに留めるためのテーマを持った施設が必要でした。富良野の最大の地域資源は食ですから、これを生かさない手はないだろう、「北の国から」で培ったふらのブランドを一カ所に集めて発信すれば、年間二〇〇万人の観光客の半分くらいが訪れる施設になってもおかしくはないと考えました。

食の魅力で観光客を引き寄せ、ゆったりと時間を過ごすなかで富良野の情報をインプットしてもらい、観光客をまちなかに回遊させるしかけをつくらう、それがフラノマルシェの発端でした。

「あえて道の駅にしなかつた理由は何かですか。」

西本 道の駅にしてしまえば、施設自体が潤っても観光客はまちなかに入ってい